

## 第33回('23)書学書道史学会大会

今年度の大会は、10月28日(土)・29日(日)の両日、文化フォーラム春日井および春日井市道風記念館において開催します。詳しいプログラムは3頁のとおりです。研究発表に加え、記念講演会と道風記念館の特別展見学を企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

本状は大会当日にお持ちください。大会専用バスの利用時や会場入棟時に、会員の確認として使用する場合があります。

なお、本大会の開催に関する最新の情報は学会ホームページでお知らせいたしますので、本状発送の後も随時ご確認ください。またホームページには、本状のデータを掲載しますので、適宜ご利用ください。

### 10月28日(土)

12:00	受付開始
13:00～14:00	開会式・総会
14:10～17:00	研究発表

### 10月29日(日)

9:30	受付開始
10:20～12:00	研究発表
13:00～14:10	記念講演
14:10～14:20	閉会式
14:40～	道風記念館特別展見学

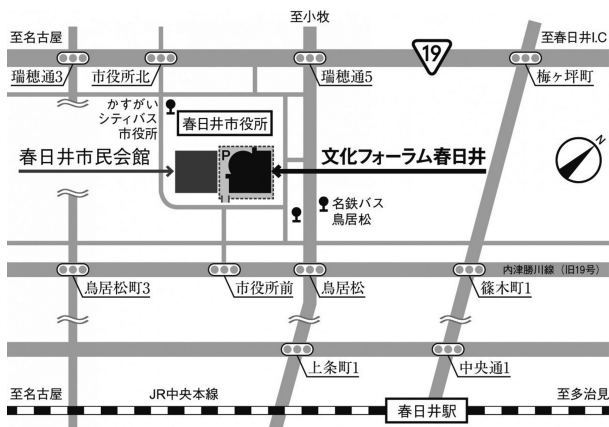


〈文化フォーラム春日井〉



〈春日井市道風記念館〉

会場の文化フォーラム春日井・道風記念館には、次頁のとおり無料の専用バスを用意します。



〈文化フォーラム春日井アクセスマップ〉

〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町5-44  
名鉄バス「鳥居松」下車、西へ徒歩2分  
春日井市シティバス東北部線・東南部線「市役所」下車



〈春日井市道風記念館アクセスマップ〉

〒486-0932 愛知県春日井市松河戸町5-9-3  
春日井市シティバス南部線「道風記念館」下車

## 大会専用バスのご案内

春日井駅北口バス停より発車します（名鉄バス）。案内係に本状を提示してご乗車ください。

**10月28日(土)** 春日井駅発 第1便 12:00（文化フォーラム春日井着 12:10）

春日井駅発 第2便 12:40（文化フォーラム春日井着 12:50）

文化フォーラム春日井発 第1便 17:15（春日井駅着 17:25）

文化フォーラム春日井発 第2便 17:45（春日井駅着 17:55）

※この日も道風記念館が見学できます。

文化フォーラム春日井発 17:15（道風記念館着 17:25）

道風記念館発 19:00（勝川駅 19:10）

**10月29日(日)** 春日井駅発 第1便 9:20（文化フォーラム春日井着 9:30）

春日井駅発 第2便 10:00（文化フォーラム春日井着 10:10）

文化フォーラム春日井発 14:30（道風記念館経由 14:40 勝川駅着 15:00）

道風記念館までマイクロバス同時発車

道風記念館発 16:30（勝川駅着 16:40）大型+マイクロバス同時発車

## 大会関係各種連絡事項

○大会参加申込みは、**10月13日(金) まで**に下記の URL または二次元コードから **申し込みフォーム** にアクセスしていただき、必要事項を入力の上 **ご送信ください**。

アクセスが難しい場合は、事務局まで（連絡先は4頁）ご一報願います。

<https://forms.office.com/r/jjRmEnPky9>



○大会参加費（資料代を含む）は、同封の「**振込取扱票**」に必要事項をご記入の上、**10月13日(金) まで**に納入してください。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。会費との合計金額の入金は禁止いたします。やむを得ず払込票を利用せず、口座に直接参加費を入金する場合は氏名の頭に「0」を付けて入金してください。なお、当日会場では、現金を取り扱いませんので、あしからずご了承ください。

○今大会では、会場の都合により、非会員の**同伴を認めません**。

○大会参加費は、**一般会員が 2,000 円、学生会員は無料**です。今大会では懇親会はありません。

○新型コロナウイルスは5類感染症へ移行したところですが、引き続き、感染予防にご留意ください。なお、会場の都合から、当日は**マスクの着用**にご協力願います。コロナ対策の詳細はホームページにも掲載いたしますので、ご確認ください。

○今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方に対し、大会の模様を**オンラインで配信**いたします。この場合でも、一般会員には上記の期限までに参加費の納入が必要となります。オンラインでの参加を希望する方は、上記の**申し込みフォームの所定欄に入力**してください。

○**昼食は、各自でご用意ください**。周辺の食事処もご案内いたします。**視聴覚ホールは飲食禁止**ですが、会議室は飲食可です。なお、役員・幹事の方には28日の昼食を別途用意いたします。

○宿泊ホテル等については、各自で手配していただくこととし、事務局では手配いたしません。

○道風記念館のご厚意により、会員は大会両日に限り無料で見学できます。28日(土)は、19時まで開館を延長していただきます。見学に際しては、必ず大会の受付でお渡しする名札を付け、同館の受付で会員である旨をお伝え願います。

## 第33回('23)書学書道史学会大会プログラム

10月28日(土) 於：文化フォーラム春日井・視聴覚ホール

12:00 受付開始

13:00～14:00 開会式・総会

14:10～17:00 研究発表

- ① 14:10～14:40 「清末における呉昌碩の「国家観念」—呉昌碩の書簡と時局を通して—」  
王 娜婷 (安田女子大学大学院) 【司会：富田 淳】
- ② 14:40～15:10 「雑体書の歴史における連続性と非連続性」  
仲村 康太郎 (京都大学大学院) 【司会：福田 哲之】
- ③ 15:20～15:50 「趙之謙「福德長寿」印と「福德長寿之斎」横幅の典拠について」  
沈 伯陽 (東京中央オークション) 【司会：中村 史朗】
- ④ 15:50～16:20 「澤田東江の学書法とその史的位置づけについて—東江の弟子・齋田東野の資料を中心に—」  
峯岸 佳葉 (齋田記念館) 【司会：高橋 利郎】
- ⑤ 16:30～17:00 「中国近現代の書法家研究—『中華民國三十六年中国美術年鑑』にみえる書法家について—」  
土屋 明美 (国士舘大学) 【司会：弓野 隆之】

10月29日(日) 於：文化フォーラム春日井・視聴覚ホール

9:30 受付開始

10:20～12:00 研究発表

- ⑥ 10:20～10:50 「梅舒適コレクション『丁丑劫餘印存』からみた西泠印社初期社員の一面」  
剣持翔伍 (兵庫県立美術館)・正岡知晃 (慶應義塾普通部) 【司会：増田 知之】
- ⑦ 10:50～11:20 「韓珠船本蘭亭序の奥書と游相本蘭亭序」  
高木 義隆 【司会：鍋島 稲子】
- ⑧ 11:30～12:00 「鍾繇「宣示表」の真偽に関する一考察」  
福原 啓郎 【司会：横田 恭三】

12:00～13:00 記念撮影・昼食

13:00～14:10 記念講演

「日本の書流—法性寺流を中心に—」

古谷稔氏 (東京国立博物館名誉館員・本学会名誉会員) 【司会：河内 利治】

14:10～14:20 閉会式 ※式後、道風記念館にて特別展「人と書～日本の書の息吹～」を見学

### 講師紹介 古谷 稔 (ふるやみのる) 氏

1941年東京生まれ。東京学芸大学書道科卒。東京国立博物館書跡室長・美術課長、大東文化大学文学部書道学科教授、書学書道史学会理事長を歴任。現在、東京国立博物館名誉館員、書学書道史学会名誉会員、春日井市道風記念館顧問。『中国書法を基盤とする日本書道史研究』(竹林舎 2008)、『秋萩帖と草仮名の研究』(二玄社 1996)、『かなの鑑賞基礎知識』(至文堂 1995) 等、著書多数。



## 大会に関する問い合わせ先

書学書道史学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 7F

(株) 毎日学術フォーラム内 TEL 03-6267-4550 / FAX 03-6267-4555

Email : maf-syogaku@mynavi.jp

春日井市道風記念館 TEL 0568-82-6110

## 発表者への連絡事項

- 発表者の持ち時間は、**30分(発表時間 20分、質疑応答 10分)**です。発表に際しては、時間厳守でお願いします。
- 発表者各位においては、発表資料を **A3判両面印刷最大5枚まで**（複数枚の場合は綴じること）として **10月23日(月)までに**、下記の宛先へ送付願います。**印刷部数は、17日(火)までにお知らせ**します。  
〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町 5-44  
かすがい市民文化財団 施設サービスグループ 森田様  
※送付伝票備考欄等に「**書学書道史学会研究発表資料在中**」と記載してください。
- 今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方に対し、研究発表をオンラインで配信いたします。発表者各位には、**オンライン用に、発表資料のデータ(PDFファイル)**をご作成いただき、**10月23日(月)までに**、こちらは**事務局宛にEメール**(上記参照)でご送付ください。
- 発表会場にはパソコン、プロジェクターを設置します。ご利用の場合、事務局宛にその旨をお知らせください。ご自身のパソコン(有線・無線LAN接続可能なもの)をご持参いただいても結構です。その際も、事務局へご一報願います。いずれの場合も、当日は**USBメモリー**をご持参ください(**PPTデータの他に、念のためそのPDFデータ**もご用意ください)。試写は、研究発表前の空き時間を適宜ご活用ください。
- 各発表の司会者は、諸般の事情で変更が生じる場合があります。

## 役員・幹事への連絡事項

- 理事・監事・諮問委員各位**には、必ず2頁の**申し込みフォーム**から**理事会出欠のご回答**をお願いします。**幹事各位**にも、同様に**資料封入作業の出欠の回答**をお願いします。いずれも昼食準備数を把握する関係上、ご回答にご協力ください。
- 理事・監事・諮問委員各位**には、**10月28日(土) 11:00**より本年度第3回理事会を開催いたしますので、理事会開催会場の文化フォーラム春日井・**会議室**へご参集ください。
- 幹事各位**には、**10月28日(土) 10:30**に文化フォーラム春日井・**会議室**へご参集願います。資料封入作業のほか、受付や大会運営のご協力をお願いしますので、ご承知おきください。

以 上

## ① 清末における呉昌碩の「国家観念」

— 呉昌碩の書簡と時局を通して —

王 娜婷

呉昌碩は「最後の文人」と称されるが、現在呉昌碩に関する研究には彼のいわゆる「文人」としての特質、あるいは彼の政治への関心という点が見過ごされているとはいえないか。本発表では、こうした呉昌碩の本質的な部分に着目し、次の二点を柱に置く。すなわち、(1) 拙論「呉昌碩が見る重野安繹」(『安田学術研究論集』第五一号、二〇二二)において考察した呉昌碩による重野安繹宛賀寿詩について、その時局から見ても、日清戦争の敵対国であった日本の、しかも面識のない重野との交友をなぜ熱望するのか、その背景にあるものを検討する。(2) 清末文人として呉昌碩が本来持っていた国家観念が(1)の疑問を解く鍵となるのではないか。さらにいえば、呉昌碩のその国家観念は重野宛賀寿詩にも窺われる日本人との交流やその後の社会活動にも繋がっていくのではないかと考える。

さて、清末には外交問題や内乱が頻発し、中国は受動的に近代国家へと転換する。この混乱期に文人呉昌碩はどのような立場に立って行動しようとするのか。これを明らかにするためにも、呉昌碩自身の国家観念、とりわけ彼の国民意識(National Identity)を確認することが必要となる。そこでまず、呉昌碩の子呉東邁・孫呉長艸による記述、また呉昌碩の書簡を通してこれを明確化する。次に、十九世紀末の日中思想交流に視点を広げる。日清戦争に敗北した後、清は積極的に日本の学校教育制度、政治体制、思想文化等を学ぼうとした。この思想の転換期に、重野の主張する「日清連携論」は清における官民の共通意識となっていた(陸胤「従「同文」到「国文」」『史林』第二三七号、二〇二二)。呉昌碩の官員との関係は深く、その思考は、後の「西泠印社記」にも見ることができ、本発表では「日清連携論」が清に伝わった経緯をも探り、併せて『西泠印社志稿』等との相関部分を洗い出して、呉昌碩の国家観念が彼と日本人との関係、さらには創成期の西泠印社に与えた影響を考えていきたい。

(安田女子大学大学院)

## ② 雑体書の歴史における連続性と非連続性

仲村 康太郎

常用の五体に収まらない装飾的・遊戯的な書体、いわゆる雑体書はこんにち決して十分な遺例を存せず、特に豊富な遺例を一書に収載する書籍ないし書跡は、数えるほどしか伝わらない。それらのうち、南齊・蕭子良撰と伝える京都・毘沙門堂蔵写本『篆隸文体』は、成立の古い、極めて貴重な資料として知られるものである。書写年代は鎌倉あるいは室町時代と推測され、現在では国内外を通じてこの一本しか伝わらない。『篆隸文体』以後の雑体書の遺例としては、西安碑林に存する北宋・夢英「十八体篆書碑」が比較的早く、著名なものである。両者はそれぞれ雑体書の例と書体ごとの概説を備えており、この点で共通の体裁を有する。概説は両者の文辞がよく一致し、従って「十八体篆書碑」には明らかに『篆隸文体』の影響が認められる一方で、雑体書の例はかえって意匠を異にすることが多い。このような雑体書に対する言説の連続性と、遺例の非連続性とのギャップは、両者の遺例のいずれか一方に、来歴の信憑性を疑わせる興味深い問題といえよう。ところが、従来の雑体書研究ではそもそもこの問題じたいがあまり認識されておらず、まして比較検討に至っては殆んどなされていないのが現状である。

「十八体篆書碑」以後の雑体書の遺例としては、明代の刊本がいくつか伝わる北宋・釈道肯『篆隸三十二体金剛般若波羅蜜經』や清・孫枝秀『歷朝聖賢篆書百体千文』、清・錢楨『能爾齋印譜』などが従来より知られる。これらに加え、更に近年では大柴清圓氏により、『篆隸文体』と類似する唐・韋懿『古今文字譜』の存在が明らかにされ、また丁治民氏により、「十八体篆書碑」と類似する北宋・姚敦臨「二十体篆」が『永樂大典』に部分的に存することも指摘されている。雑体書の資料がまだまだ多くはない現状において、このような新発見がなされたことの意義は大きい。

本発表では、近年出された成果をも利用して雑体書の遺例を比較し、写本『篆隸文体』にみられる遺例の信憑性、及び「十八体篆書碑」との間に存在するギャップの意味について、私見を述べたい。

(京都大学大学院)

## ③ 趙之謙「福德長寿」印と「福德長寿之齋」横幅の典拠について

沈 伯陽

趙之謙は龍門石窟の石刻から示唆を得て一八六三年の冬に「福德長寿」印を刻した。同様に、一八七四年頃に趙之謙が李夢惺に贈った楷書「福德長寿之齋」横幅にも、「福德長寿」という語が龍門の北魏石刻に由来するという落款を再び提示している。この時期、趙之謙は「北魏書」の書風を確立しつつあった。その際、特に「福德長寿之齋」の書風は、具体的にどの龍門造像から示唆を得たのか、これまで明らかにされてこなかった。この点は、趙之謙の書風の変遷を窺う点からも極めて重要な問題であると言える。

本発表では、趙之謙が当時参照した石刻を解明するため、龍門石窟の出版物及び石刻データベースから合計一八二種の龍門石窟にある北魏の石刻拓本を選出し、比較対照の作業を行った。その上で、「福德長寿」印の製作前後、すなわち一八六五年頃に趙之謙が編纂・題記した龍門造像に関する著書・①『補寰宇訪碑録』（一八六四年）・②『魏齊造像二十品』（一八七〇年頃）・③『六朝別字記』（一八六四年）・④『六朝造像』（一八六五年）なども参照し、趙之謙が取り上げた可能性の高い対象について、二つの仮説を提示したい。

まず、この「福德長寿」四文字が、景明三年の尹愛姜等造像（五〇二）と孝昌三年（五二七）の皇甫度石窟碑を組み合わせたという仮説である。もう一つの仮説は、景明年間の龍門の石刻から複数を参照・集字して自作した語であるとするものである。

いずれの仮説によっても、趙之謙は景明年間の造像を重視していたことが窺われる。『補寰宇訪碑録』の冒頭の記によれば、趙之謙は一八六四年六月に侶樵から滄州の石刻を六件入手し、自蔵石刻を加えて『補寰宇訪碑録』「失編卷」とした。当巻の自蔵石刻の北魏の部分、いずれも景明年間の龍門石刻であり、当時の趙之謙が特別に関心を持っていたことは明らかであろう。本発表は、二つの仮説の妥当性を検証するものである。

(東京中央オークション)

## ④ 澤田東江の学書法とその史的位置づけについて

— 東江の弟子・齋田東野の資料を中心に —

峯岸 佳葉

江戸中期の唐様の書家・澤田東江（一七三二～一七九六）は、儒学を井上蘭臺に、書を高頤齋に学び、儒学や詩文、書や篆刻、戯作も能くした。師の高頤齋は、明末清初の動乱期に來日した戴曼公すなわち黄檗僧の獨立性易から高天濤へと受け継がれてきた明代風の行草書を能くした。一方、明人の兪立德や獨立から、北島雪山、細井廣澤へと受け継がれた唐様の書の一派も、東江の幼年期に全盛を迎え、明代風の行草書が流行していた。東江も当初は明代の王寵に倣い、高頤齋に連なる自派の正統性を唱えたが、師の没後、王羲之を掲げて魏晋の書法への復古を宣言する。その主張は、師から弟子への伝授という日本の書流の延長のようなこれまでの唐様の書を批判し、徹底して中国の書論を読み、古法書を学ぶという、当時としては革新的で、極めて学問的なものだった。

澤田東江の研究は、今關天彰（『書苑』第三卷第二号、一九三九年）、中野三敏（『經濟往来』一九六六年）、米田彌太郎（『書論』第一三三号、一九七八年）に詳しく、また山口明観（一九九一年）、木村博昭（一九九四年）、永由徳夫（二〇一八～一九九一年）に東江の書論についての個別の研究もあるが、その史的評価は未だ充分とは言い難い。

発表者の勤める齋田記念館は、澤田東江の晩年の弟子・齋田東野（一七七三～一八五二）の資料を保管し、今秋これを公開する特別展「澤田東江から齋田東野へ―唐様の書の原点・王羲之をめざして―」を開催する。本発表では、これらの資料から東江の提唱した学書法の実態を紹介する。例を挙げれば、東江は草書を学ぶ上で草草の重要性を説くが、東野は実際に草草を習い、自作にも応用した。また、東江は、初学者は大字の楷書から学ぶことを説き、『墨場必携』の先駆で日本初の揮毫用語句集『文淵遺珠』を編輯刊行した。更には、東江の周辺で蘭亭叙が急速に広まり、現代に通ずる学書法が東江の頃に普及したことを指摘し、再評価を試みたい。

(齋田記念館)

## ⑤中国近現代の書法家研究

—『中華民国三十六年中国美術年鑑』にみえる書法家について—

土屋明美

中国近現代の書法家をめぐる研究はその伝記的研究などが行われているが書法家を体系的に把握する議論は十分な進展を見ない。また王辰昌主編『中華民国三十六年中国美術年鑑』(中国図書雑誌公司、一九四八、以下『年鑑』と略)は先行研究が指摘する様に書法家を含む清末からの幅広い美術界の動向を収める点など往時に編まれた第一級の美術史料であるがその諸本の実際は明らかではない。

そこで本研究では中国近現代の書法家を体系的に把握するために諸本(上海図書館・台湾大学図書館・中国医薬大学図書館・国立故宫博物院図書館所蔵『年鑑』)及び今回新たに入手した『年鑑』を対照した後、「美術家伝略分類索引」の領域(十四)のうち書法家に配された二四二名について国立国会図書館ホームページ「中国の絵画・書道を調べる」に掲載されている文献(人名や現代人物など)について掲載されているものも適宜引用しつつ、その詳細を明らかにする。

本発表の検討方法として、まず『年鑑』諸本について解明する。具体的には①台湾大学図書館・中国医薬大学図書館所蔵『年鑑』の複写の取寄せ、②管見するところ国内に所蔵されていない『年鑑』の購入、③台湾大学図書館・中国医薬大学図書館・国立故宫博物院図書館所蔵『年鑑』の実査、④各『年鑑』における書法家の分類・体系・記述内容・項目などの整理を行う。次に『年鑑』にみえる「美術家伝略分類索引」の領域(十四)のうち書法家に配された二四二名について国立国会図書館のホームページ「中国の絵画・書道を調べる」に掲載されている文献を国立国会図書館(本館・関西館)にて実査した後、各書法家に関連する箇所を精査して中国近現代の書法家を体系的に把握するための裏付けとしたい。

(国士舘大学)

## ⑥梅舒適コレクション『丁丑劫餘印存』からみた西泠印社初期社員の一面

剣持翔伍・正岡知晃

『丁丑劫餘印存』は、丁仁(字・輔之、一八七九—一九四九)・高時敷(号・絡園、一八八六—一九七六)・葛昌楹(字・書徵、一八九二—一九六三)・俞人萃(字・序文、一八九七—一九四二)の浙西四家によって、一九三九年(己卯・中華民国二十八年)に成立した印譜である(題字・王禔(福庵)、序文・高時頤(野侯))。収録印は第二次上海事変(一九三七年)を逃れた際の所蔵印であり、明代から民国初頭に至るまでの歴代印人二七三家一九〇〇余方で構成され、線装本二〇冊にわたり鈐されている。同印譜は「浙西丁高葛俞四家蔵印集拓廿又一部己卯春成書」の各一字ずつをシリアルナンバーとして付した二一部のみが流布(以下、「二一部本」)したとされる。

同印譜については浙江図書館蔵本(「浙」字No.1)、上海図書館蔵本、東京国立博物館蔵本(「又」字No.14)、林章松氏蔵本(「拓」字No.12)の存在が知られているが、新たに梅舒適コレクションにも『丁丑劫餘印存』が発見された(以下、「梅本」)。ところが、梅本は全一二冊本で各冊に題簽を有さず、各冊冒頭に付される印人小伝が第一冊にまとめられるなど、他と異なる体裁をもつ。さらに、序文や小伝の字句に異同が認められること、呉昌碩の収録印が二一部本とすべて異なるなど固有の特徴がいくつも挙げられ、梅本は二一部本に属さない『丁丑劫餘印存』の稿本の一つである可能性が高い。

本発表では、はじめに梅本と諸本の比較を通じて、その資料的価値を指摘する。また、梅本には高時頤・葛昌楹が鈐拓者である王秀仁(生卒年不詳)にあてた肉筆の跋文が備わる。これと関連する作品や資料を参照しつつ、同印譜の編輯状況を考察する。さらに、同印譜は西泠印社が刊行した原鈐印譜の掉尾を飾ったことから、編輯に關与した西泠印社創始者や浙西四家を中心とした初期社員の活動や交友、その果たした役割についても明示したい。

本発表は、戦乱にあっても新時代へと歩を進める往時の芸苑や、さらには文物の流転・保存・出版を中心とした文化動向の解明にも資するものと考えられる。

(兵庫県立美術館・慶應義塾普通部)

## ⑦ 韓珠船本蘭亭序の奥書と游相本蘭亭序

高木 義隆

韓珠船本蘭亭序の奥書の由来を解明するとともに、韓珠船本蘭亭序の価値を再評価する。

・台東区書道博物館に、定武蘭亭序の古拓本として有名な韓珠船本蘭亭序があるが、その末尾に唐代末期乾符元年の奥書がついている。

・この奥書が定武蘭亭にもともと付属していたものだとしたら、定武蘭亭の起源素性が、かなり解明できたことになる。しかし、それは間違いである。

・この奥書は、もともとは別の拓本についていたものである。それは、游相本乙之一 雙鉤部分字本蘭亭序（香港中文大学文物館）と同石の拓本である。そして、游相本乙之一から切り取ったものではない。耕霞館法帖による游相本の道光年間の重刻拓本によって、示すことができる。

・王信（一一三七—一一九四）が、南宋時代紹熙二年（一一九二）年に顔真卿の「與澄師大德帖」とともに会稽の役所で刻したものである。耕霞館法帖にみるように、唐末の奥書、蔡襄跋も含めて刻されていた。これは、桑世昌『蘭亭考』の記述によって論証できる。

・この奥書と蔡襄跋それ自体が偽作である可能性もある。しかし、游相本乙之一は、南宋時代に収集家が蘭亭序墨跡を獲得し、刻石に至るまでの経緯・事情を追える資料である。そして、南宋時代における、唐時代末期の蘭亭序模写事業への見方をしめす例としては、興味深い。

・韓珠船本蘭亭本体は「五字未損」の定武蘭亭の重刻本の中では、比較的優秀な古拓本である。それは、定武蘭亭真本（台北國立故宮博物院）、許彥先本（東京国立博物館）との比較によって評価することができる。

## ⑧ 鍾繇「宣示表」の真偽に関する一考察

福原 啓郎

「宣示表」の確実な消息は、王僧虔『論書』と褚遂良『晋右軍王羲之書目』によると、その小楷の真蹟は東晋代に湮滅し、代わって王羲之の臨本が初唐までは伝わっていたというぐらいである。

では『淳化閣帖』所収の「宣示表」の文章は鍾繇が執筆したものであろうか。その内容の主旨は、孫権の臣従を願う心持を推測した上で、その受け入れを説くのであり、黄初二年（二二二）八月、劉備の亡き関羽の弔い合戦に直面した孫権の臣従の申し入れに対して、群臣の論争を踏まえた文帝曹丕は受け入れを決断し、孫権を呉王に封じた（『三国志』呉書、呉主権伝など）という史実に対応する。内容の主旨と史実から判断すると、「宣示表」はこのときに鍾繇が文帝に奉った表であらう。まず内朝での侍中劉曄の拒絶の議論などがあり、ついで「尚書宣示」により外朝をも含めた朝廷全体での論争に拡大したのであり、当時、七十一歳、廷尉であった鍾繇の「宣示表」は、後半での受け入れの議論の一つである。

注目すべきは、第一に「宣示表」はその書式（蔡邕『独断』）からは厳密には表とは言えない点（『停雲館帖』などの法帖では「宣示帖」と題す）、第二に文中に「願君思省」「唯君恐不可采、故不自拜表」と、「陛下」ではなく、「二人称の敬称である「君」が使われている点である（ちなみに、文帝から孫権への策命に「今封君為呉王」とある）。ということは、「宣示表」は、「師友」関係を結んでいた鍾繇の三十六歳年下の魏王国太子曹丕への尺牘（『全三国文』鍾繇）の延長線上に位置し、公式な表ではなく、私的な尺牘の側面があり、それ故に表の書式に従わなかったのではないか。

以上、「宣示表」の文章が有する二つの問題点から、その内容から窺える鍾繇の細やかな心配りの表現と相俟って、逆説的ではあるが、文章に限っては偽作ではなく、私的な表であったと、私は考えるのである。